

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-8

極上の貴腐ワインを半分ほど空けたところで、辰巳は麻里子を寢床へ誘った。

くちづけをするたびにヴァニラの香りが立ち上がった。

吸いつくような白い肌に手を優しく這わせると形の良い乳房や臀部がふるえて、貴腐ワインの残り香が微霧となって拡散する。

女は男が考えていたより数段美しかった。

男はクリトリスを指で弄びながら、首筋から耳朶にかけてくちづけして、乳首を軽く囁んだ。女の息づかいが荒くなって喉が小さく震えだすと男は女的美脚を広げて中へ入っていた。

女の怜悧な眼に悲哀があった。

女は大学生当時に研究室の助手と関係を持ったが、相手の独善的なセックスがトラウマとなり、それから親しくなった幾人かの男に求められる状況になっても、セックスだけは頑なに拒絶してきた。

麻里子のヴァギナは濡れていたにもかかわらず痛がっているのがわかったので、ペニスを動かさないで、うりざね顔の臉やおちょぼ口とか髪とか首筋とかを口でソフトタッチしているうちに膣の中が温かくなってきた。

時の過ぎ行くままに この身をまかせ

男と女が ただよいながら

墮ちてゆくのも しあわせだよと

辰巳はゆっくりと霧の中に分け入るようにしてペニスを動かし始めた。

「大丈夫かい？」

「ええ、今まで感じたことのない感覚だわ」

「こう？」

「そうして、そうしてください」

「ほら、もっとかい？」

「あっ……」

麻里子は喘ぎながら、体を小刻みに痙攣させた。

麻里子は辰巳の腕の中で、初めて達したオルガズムのうら悲しい声をあげた。

「あなたが私の最初の男だったら……」と麻里子はいどみかかるように言って、遠慮を忘れた艶めきを揺らした。

「もし時間を組みかえることができたとしたら、ここでこうしてはいられなかつただろうね」と辰巳は笑って、白磁のように滑らかでしっとりとした女の臀部をぴしゃりぴしゃりと叩いた。